大　萱　場　古　墳

1985

長岡市教育委員会

序

この調査報告書は，雲出地区工業団地開発整備事業にともない発掘調査を実施しました「大萱場古墳」の記録です。

大萱場古墳の所在地は長岡市を眺望する関原丘陵地帯にあって，東側は北陸自動車道が走り，西側は松や杉などが繁茂する山地で，長岡ニュータウン雲出地区の隣接地に在ります。

今回の発掘調査によって長岡市を中心とした地域では初めての古墳が発見されたもので，その主体部から金環，鉄刀，刀子，ガラス小玉等が発見されました。

この記録が，今後出土品とともに文化財の理解と認識を深めていくうえで活用され，役立つことを願っております。

最後に，今回の調査にあたり多大の御援助，御協力をいただいた新潟県教育委員会，長岡地域土地開発公社，及び関係者に対し心からお礼申しあげます。

昭和60年３月

長岡市教育委員会

教育長　　丸山　博

例　　言

1．本書は雲出地区工業団地開発整備事業に伴う大萱場（おおかやば）古墳（新潟県長岡市雲出字大萱場）の発掘調査の記録である。

2．発掘調査は長岡市教育委員会が主体となり，駒形敏朗（長岡市教育委員会　学芸員）が調査を担当した。なお，調査費は全額，長岡地域土地開発公社の負担である。

3．古墳の写真撮影・実測および，遺物の整理から図版の作成まで，調査参加者が全員であたった。

4．本書は駒形を中心に調査参加者全員で協議して，分担執筆したもので，駒形が全体をまとめた。執筆分担は，３．岩崎均，４．小熊博史，7—(１) 佐野順一，7—(２) 冨田和気夫，他は駒形が執筆した。

5．挿図中の数字は標高を示す（単位，メートル）。

6．調査記録および出土品は長岡市教育委員会が保管している。

7．発掘調査から本書の作成まで，下記の方々をはじめ多くの機関・諸氏から御指導・御協力を賜った。ここに深く感謝を申しあげる次第である。　　（五十音順・敬称略）

甘粕　健，石原正敏，小野　昭，金子正典，関　雅之，中島栄一，中村孝三郎

1．調査にいたるまで

長岡市はテクノポリスの指定を受け，先端技術産業の受け皿として長岡ニュータウン雲出地区に隣接して，工業団地造成予定地を確保した。遺跡地図には予定地内に谷内・袖谷内・大萱場・下屋敷Aの集落跡と大萱場塚の5遺跡がプロットされていた。このため，長岡市都市整備部長から長岡市教育委員会社会教育課に遺跡調査の依頼が本年度の5月15日にあった。これを受けて予定地内の遺跡分布調査をし，遺跡地図上の集落跡では1点も遺物が発見されず，塚は遺跡カードに記載されているように自然地形が水田などで削りとられた残存ではないかなどを確認した。ところが，この分布調査で大萱場遺跡の近くで，塚を1基発見した。

分布調査後の遺跡取扱いについての協議では，遺跡地図上の5遺跡は試掘調査を59年度に実施して内容を把握した上で60年度に発掘調査をすること，新発見の塚は59年度に発掘調査することを話しあった。また，新発見の塚は古墳の可能性もあるので，調査で古墳と判明した時は，長岡市で唯一の古墳として保存されるよう，開発主体者に対し申し入れを行った。

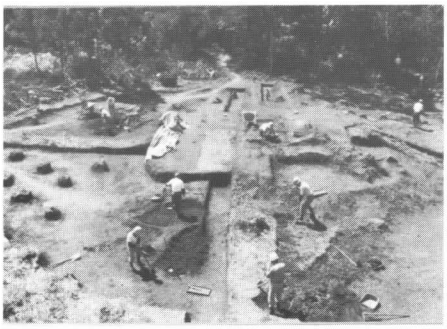
2．調　査　の　経　過

大萱場古墳の発掘調査は6月中旬から11月上旬まで，藤橋遺跡の調査などでの2回の中断をはさんで行った。第1次の調査（6月11日～7月14日）は墳丘の測量をし，墳丘土層観察用の土手を十文字に設定することから開始した。1次の前半では墳頂下1mで礫群の検出，周溝の発掘と各種須恵器の検出および図化を行う。後半の調査では礫群の南側にトレンチを入れて発掘し，礫床・礫壁の検出と金環を発見する。この時点で県文化行政課中島栄一係長の来跡を仰ぎ，本塚が古墳であることの確認と今後の調査方法についての指導をいただく。なお，古墳の発掘は墓室上面の礫群のレベルでもってとどめ，古墳基底部の測量を行う。

第2次（8月30日～9月8日）は墓室の内容をつかむことを目的として行う。そして，墓室内の壁が礫で組まれ，壁の内外に木炭が混入していること，礫床の範囲などを確認する。

また，第1・2次の調査中に工業団地造成予定地内の5遺跡の試掘調査を実施し，いずれも遺構や遺物が発見されないことなどから，積極的に遺跡とは判断しがたいことを確認する。

第3次（11月5日～9日）では礫床下の状況を探るため，幅30cmのトレンチを墓室内に設け，礫床下の周溝の存在を確認する。そして，保存のために墓室に砂を埋めて，調査を終了する。

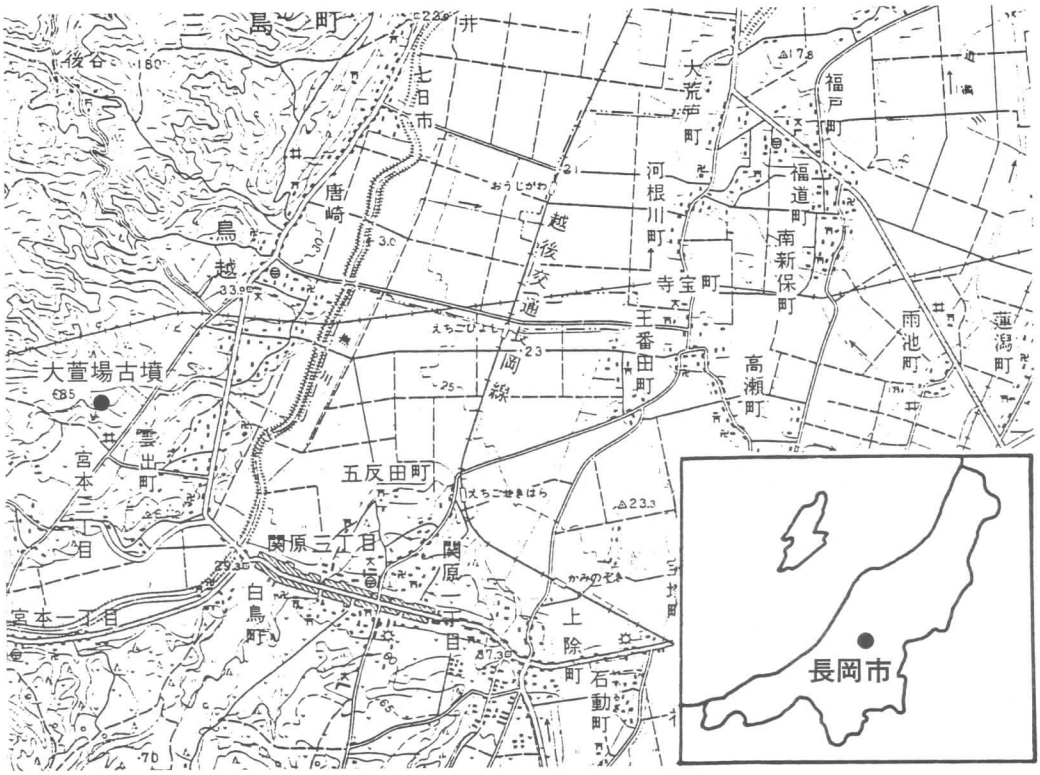


調査風景

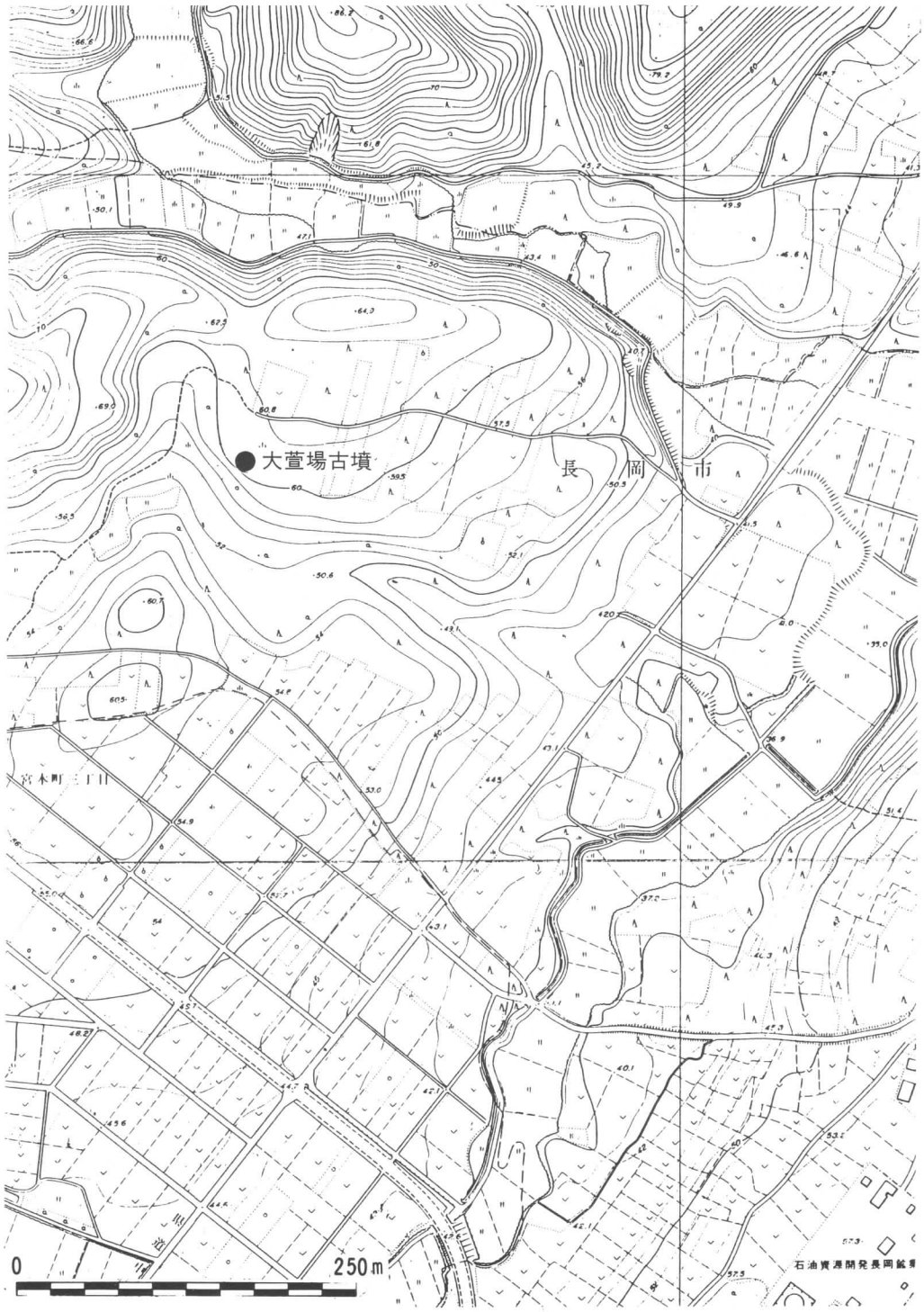
3．環　　境

東頸城丘陵は，信越国境から峰を南西－北東に連ねて越後平野西縁の沖積地に至る。大萱場古墳は，長岡市西部に広がるこの丘陵の東端，標高約60ｍの舌状台地上に位置する。北東には信濃川西岸に発達した河岸段丘があり，南方１㎞程には，信濃川支流の黒川が北東方向へ流れている。本古墳は，北には谷に面す急斜面，東と南には緩斜面を有する台地上の平端面南縁に立地するが，墳丘底面はわずかに南斜している。

周辺ではこれまで古墳が発見されておらず，古墳時代の遺跡も確認されていない。①小規模の円墳が単独で存在していること，②平野部から見て奥まった位置にあり，眺望もあまり良くないこと，等が立地の特異性として挙げられる。周辺には，これまで中世の塚と考えられてきたものが数多くあり，大萱場古墳の発見により，これら塚群を再検討する必要性が強く生じてきたといえる。



第１図　古墳位置図（１：50,000　長岡）



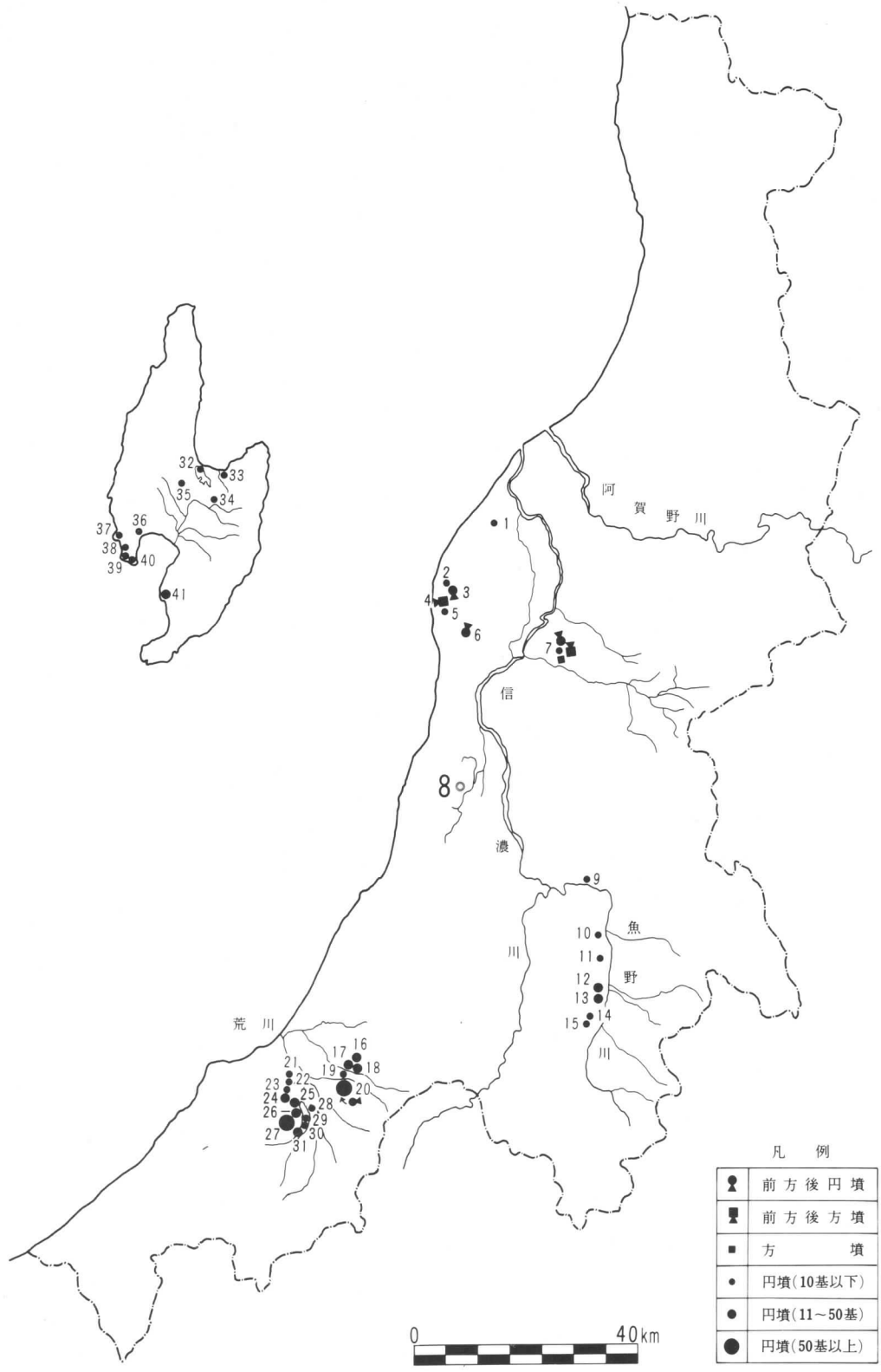
第2図　遺跡周辺図

4．新潟県の古墳分布と大萱場古墳

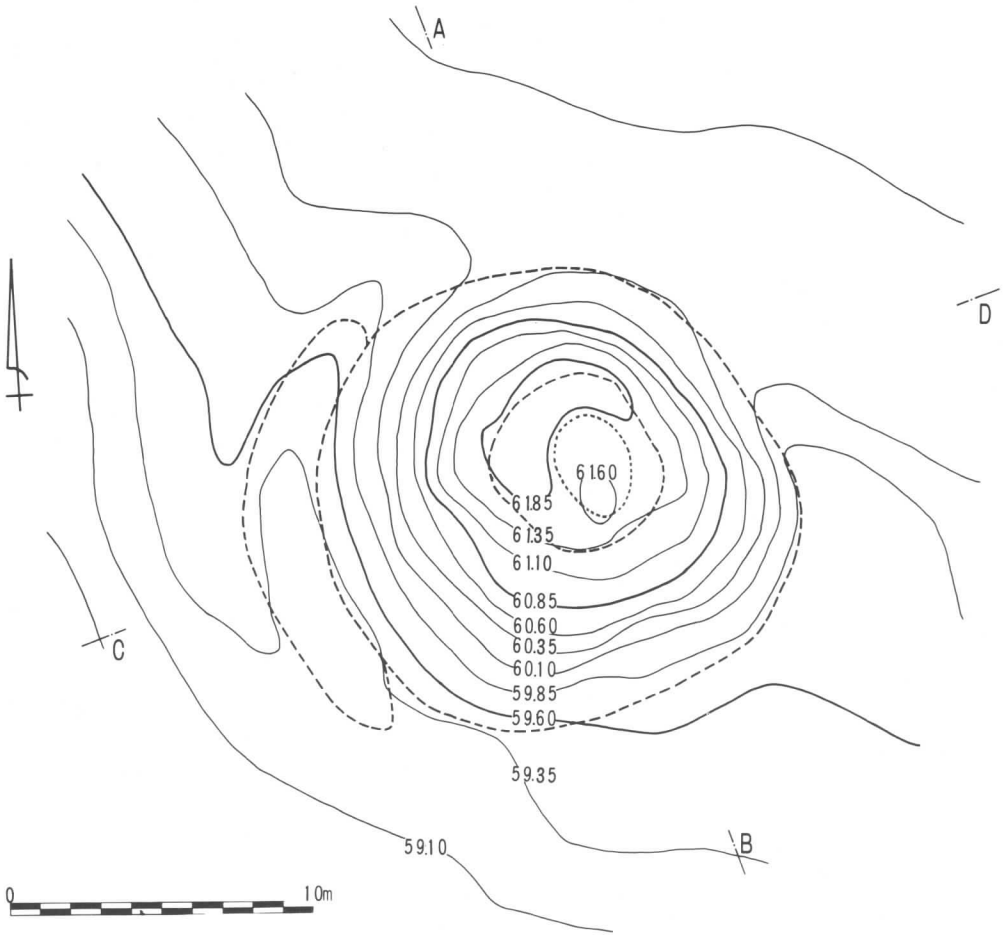
新潟県における古墳の分布状況を第3図に示した。分布には偏りがみられ，蒲原平野西部・魚野川流域・頸城地方・佐渡の4地域に集中していることがわかる。蒲原平野西部には比較的古式の古墳が存在し，魚野川流域および頸城地方では古墳時代後期を中心に造営された群集墳が集中して分布している。また，佐渡においては離島としての特殊性を反映して、後期古墳が本土の群集的な立地と異なり，単独で点在する状況を示している。

それぞれ地域的な特色をもつ集中域が確認されている反面，阿賀野川流域およびそれ以北の地域や信濃川本流域などでは古墳の空白地帯というべき状況を呈していた。このような状況下において，大萱場古墳の存在が確認されたことは，近年，測量調査の実施された三条市三王山古墳群同様，分立する古墳集中地域間の相関性を明らかにしていく上で重要と考えられる。

No.	名　称	所在地	基　数	No.	名　称	所在地	基　数
1	緒立八幡古墳	黒埼町	円1	22	黒田古墳群	上越市	円8
2	隼人塚古墳	巻町	円1	23	南山古墳群	〃	円6
3	菖蒲塚古墳	〃	前方後円1	24	稲荷山古墳群	〃	円15
4	山谷古墳	〃	前方後方1	25	青田古墳群	新井市	円14
5	観音山古墳	岩室村	円1	26	観音平古墳群	〃	円37
6	稲場塚古墳	弥彦村	前方後円1	27	天神堂古墳群	〃	円118
7	三王山古墳群	三条市	前方後円：方各1 方5，円10	28	月岡古墳群	〃	円3以上
8	**大萱場古墳**	**長岡市**	**円1**	29	梨ノ木古墳群	〃	円4
9	古林古墳群	堀之内町	円6	30	谷内林古墳群	〃	円6
10	下山古墳群	大和町	円6	31	小丸山古墳群	〃	円16
11	名木沢古墳	〃	円1	32	住吉古墳群	両津市	円2
12	蟻子山古墳群	六日町	円91	33	河崎古墳	〃	円1
13	飯綱山古墳群	〃	円65	34	蝦夷ヶ平古墳	新穂村	円1
14	吉里古墳群	塩沢町	円5	35	安養寺古墳	両津市	円1
15	南山古墳群	〃	円6	36	沢根古墳	佐和田町	円1
16	水吉古墳群	三和村	円15～16	37	岩塚古墳	相川町	円1
17	水科古墳群	〃	円34	38	橘古墳	〃	円1
18	宮口古墳群	牧村	円31	39	宮の浦古墳	〃	円1
19	高士古墳群	上越市	円（旧10～）	40	稲鯨古墳	〃	円1
20	菅原古墳群	清里村	前方後円1 円30（旧107）	41	真野古墳群	真野町	円18
21	灰塚古墳	上越市	円1				



第3図　新潟県の古墳分布



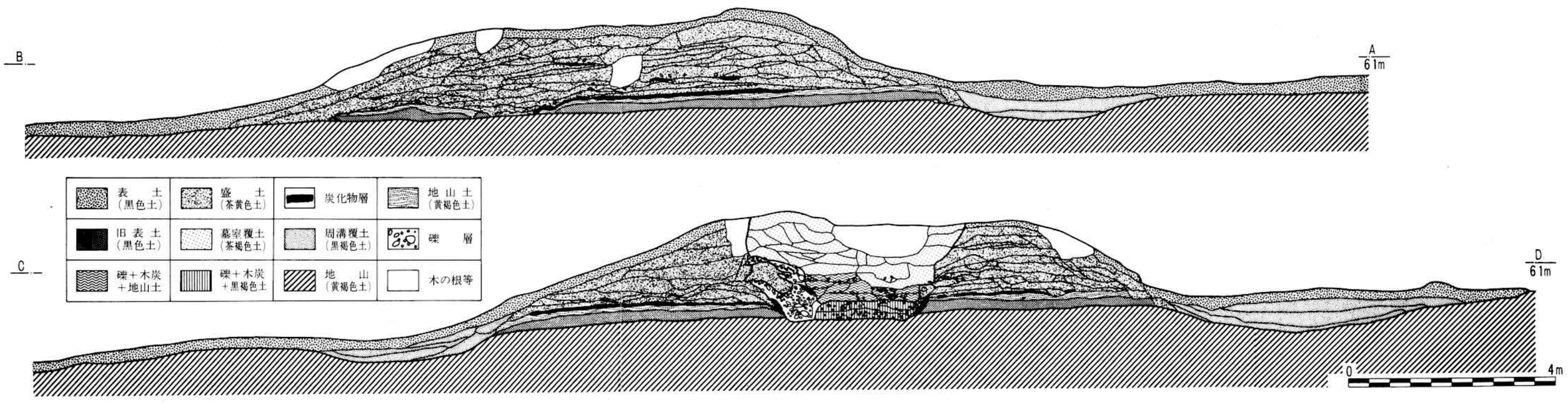
第4図　古墳全測図

5．古　墳　の　形　態

外部形態（第4図）

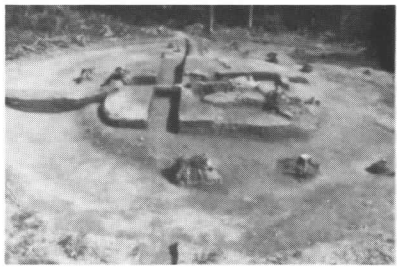
大萱場古墳は長岡市と三島町の境界を流れる長楽川の南側で，西の山地から東へ延びる舌状舌地の付け根に近い，標高60ｍの台地南側縁辺部に位置している。本古墳の周辺は畑地に開墾され，その後に杉の植林地として使用されているところが多い。しかし，本古墳が所在する一帯は旧地主が燃料用木材の供給地――ボイヤマとして使用されていたところで，燃料事情の変遷後も雑木林のままに残されていた。このことが，本古墳が終戦前後の食糧事情が悪化していた時にも開墾されることなく，現在まで保存されるのに寄与したのであろう。

本古墳は直径15ｍの円墳で，南西側がやや裾ひろがりの様相を呈していた。墳丘の高さは北東側の台地中央寄りでは約１ｍ，南の沢側からだと約2.5ｍを測る。墳頂部は長辺約5.5


B
A
61m
表　土
（黒色土）
盛　土
（茶黄色土）
炭化物層
地山土
（黄褐色土）
旧表土
（黒色土）
墓室覆土
（茶褐色土）
周溝覆土
（黒褐色土）
礫　層
礫＋木炭
＋地山土
礫＋木炭
＋黒褐色土
地　山
（黄褐色土）
木の根等
C
D
61m
0
4m

第5図　古墳断面図

m，短辺約５ｍの方形の平担面である。平担面の中央に長径約3.3m，短径約2.3ｍの楕円形状の落ち込みがあり，その落ち込みを囲むように弧状の高まりが北西側にみられた。また，墳丘の南面にかすかながら等高線の乱れがみられる。


調査中の古墳

墳丘の東と西側に周溝の痕跡が観察される。特に西側の周溝は天端幅2.5m，深さ30cmの規模で墳丘の裾を四半分ほど巡っているのがよく看取された。この西側の周溝の外側には，最大幅２ｍ，高さ30cmの周堤帯状の高まりが，周溝に沿うように巡っていた。

周　溝（第６図）

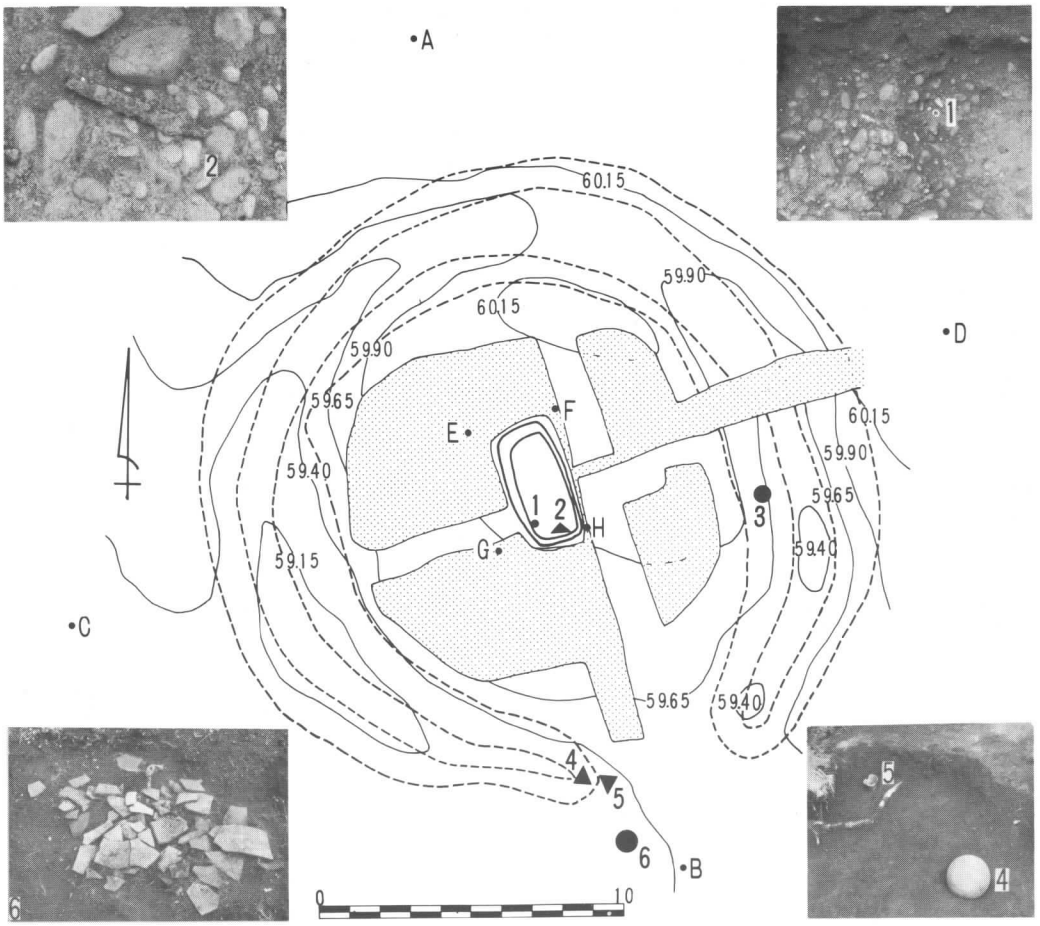
外形上からも観察される周溝は，調査によって墳丘の南側で４ｍにわたってブリッジ状に途切れるものの，天端幅2.5～３ｍ，底面幅１～２ｍ，深さ50～70cmの規模で墳丘の裾を一巡することが判明した。周溝の掘り方は浅い皿状である（第５図）。ブリッジから周溝への落ち込みは，どちらかと言えばダラダラと下るようであった。このブリッジの位置は墓室の長軸線の延長線にあたる。この延長線上の墳丘が，先に述べた等高線に乱れがあったところである。

本古墳出土遺物のうち，須恵器は３点とも周溝及びブリッジからである（第６図中の３は甕，４・５は平瓶の口頸部と胴部，６は大甕の出土位置）。特に液体容器と思われる平瓶と大甕がブリッジ周辺に位置していたことは，本古墳の葬送儀礼を考える際に何らかの手がかりになるものと思われる。

封　土（第５図）

本古墳の盛土材は周溝と周辺の台地から供給された旧表土の黒色土と地山の黄褐色土との混合土（以下「盛土」）である。本古墳の土層を基底部からみると，地山・旧表土・地山の黄褐色土（以下「地山土」）・木炭層・盛土の順である。地山土と盛土の間にある木炭層は厚くとも５cm，平均して２cmほどである。この木炭層は地山土の全面を覆うように分布していると，土層断面から看取される。つまり，基底となった旧表土上の地山土と木炭層は本古墳封土の最基盤をなすものと言えよう。また，墳丘中央に盛土堆積の乱れがあるが，この部分に墓室が位置しており，遺体を安置したのちの埋土によるものと考えられる。なお，墓室周辺の土層については「６・墓室」の項でみることにする。

A・B土層断面



第6図　発掘後の古墳測量図（ドットの範囲は墓室上面以下が未発掘部分）

6．墓　　室

墓室の発見

本古墳の墓室は墳丘のほぼ中央に位置し，礫を使用した側壁・床及び墓室下の周溝から構成されていた。規模は墓室上面で長辺（南北）4 m，短辺（東西）2 m，深さ70～90cmの長方形の箱形を呈している。墓室の長軸線の方位はN－12°－Wである。この長軸線の延長線上にはブリッジがある。また，墓室の位置は墳頂部の平坦面にみられた浅い落ち込みにほぼ一致する。なお，この墓室の検出・調査には次のような経過をたどっている。

本古墳は長岡周辺に点在する中世の塚との認識で調査を開始した。墳頂部から順次，水平に墳丘を発掘していったところ，土層観察用の土手をはさんで東・西に礫群が発見された。礫群は中央部がマバラ，周辺部が密な状態で4×5 mの範囲に分布していた（第7図）。礫群

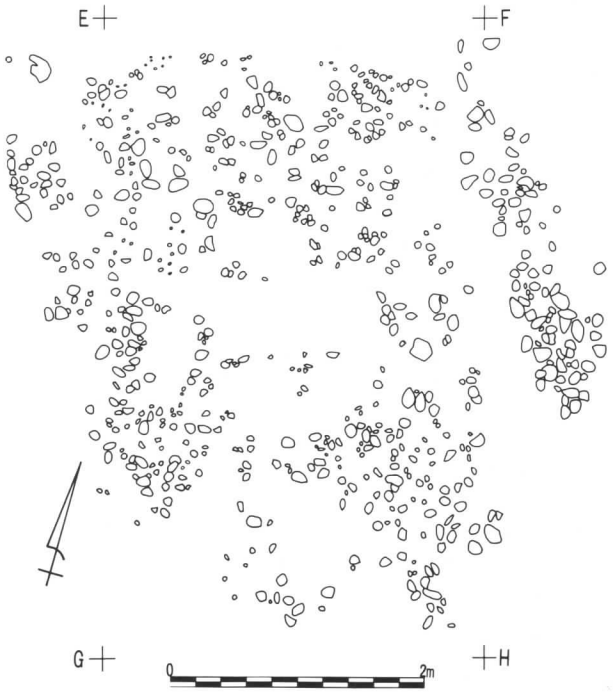
は西と東では40㎝近い高低差があり，西が高くなっていた。礫群の礫の大きさは，墓室の側壁と床で使用されているものと同じで，小石からコブシ大であった。

礫群の下部の盛土状況を調査するため，土層観察用の土手に沿って，さらに墳丘を十文字に掘り下げた。この結果，C－Dラインの下部で礫床と金環を発見し，ここで初めて古墳と認識し，墓室の一部を掘りあてたことを確認したのである。本来ならば墓室上面の礫群を取り除いて，墓室の掘り方を確認するのであろうが，礫群に石室の天井石のような巨石が検出されないこともあって，先のような調査で墓室を確認したのである。そして，墓室はトレンチ内から発掘を進めていった。

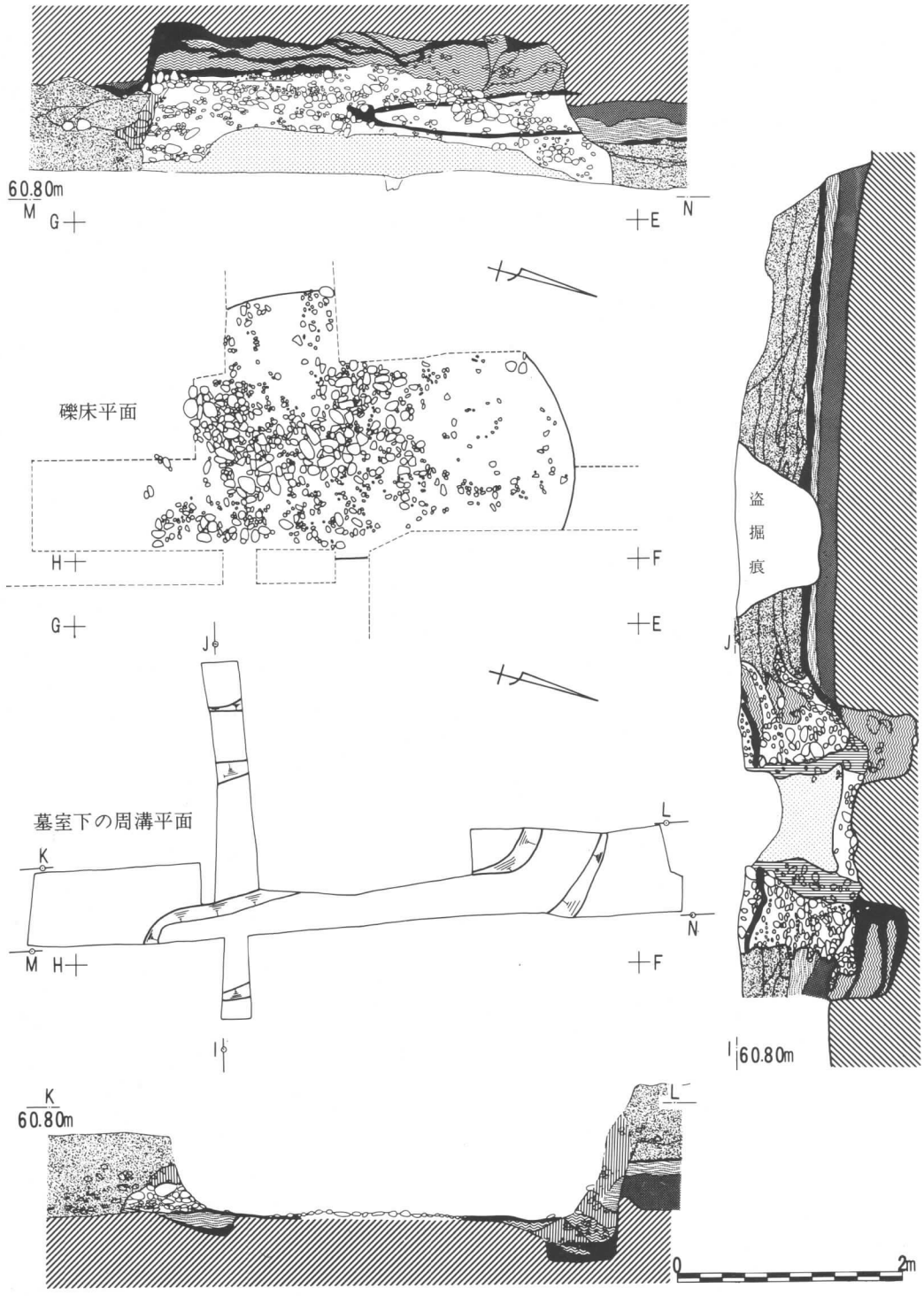
側　　壁（第8図）

側壁は保存状態の最もよい南側の断面（第8図Ｉ－Ｊライン）でみると，平均して20㎝前後，厚いところで30㎝の礫の壁となっている。礫壁の墓室内側は礫が少なく，木炭を多く含んだ土の壁である。礫壁の高さは90㎝で，やや内側に傾斜しながら直線的に立ちあがっていた。礫壁の封土側はところどころで角（つの）のように封土の中に礫と木炭の層が飛び出していた。東礫壁の角は小さいが，西礫壁の角の飛び出しはより顕著である。そして，礫壁全体が墓室内側に向って押しつぶされたような形で角が傾斜している。この角は封土の堆積状態とよく合致している。このことは墓室が盛土完了後に墳頂部を掘り込んで設けられたとするよりは，墓室の側壁礫を積みあげるのと封土の盛土は同時に行なわれたと，考えられることを示している。

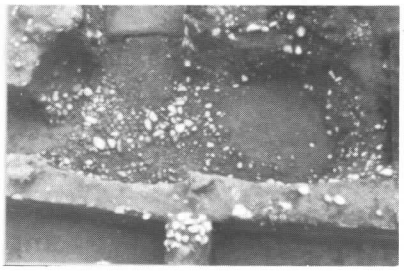
礫壁がＩ－Ｊラインのようによく保存されているのは，東側壁の南寄りと西側壁だけで，東面の大半と北面は断面図からもみられるようにけっして良好とは言えない状態であった。これと1ｍの間をおいた北壁(第5図C－Dライン)をみても，西側の礫壁が整然と礫で積まれているのに対し，東側は礫壁をなすような礫の積みあげはみられず，かなり乱れている。この現象は先に述べた墓室上面の礫



第7図　墓室上面の礫群



第8図　墓　　室（E～Hは第6・7図のE～Hの点・クロスに合致する）



墓　室

群の高低差にも関係するのであろうか。例えば，礫壁の乱れているところが盗掘を受け，礫壁の礫が墓室上面にあげられたとも考えられる。これは墓室内からの遺物がすべて墓室南側だけに限られていることとも関係していると思われる。

なお，礫壁は礫を主としているが，木炭も少なからず混入していることも，本古墳の墓室の系譜などを考える時に特徴的なことのひとつである。

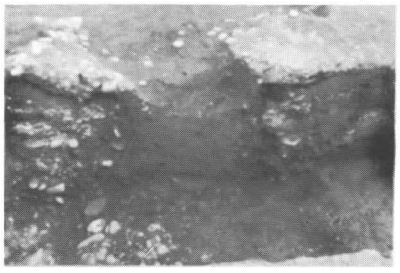
ところで，礫壁の立ちあがりが70～90cmもあるのは東・西・北の３面で，南面は礫の積みあげが40cmと他の面の半分しかなく，礫群の断面は底面70cmの三角形状を呈している（第８図Ｋ－Ｌライン）。この礫群は形態から，礫壁というよりは墓室と墓道の境におかれることが多い閉塞石的な性格をもっていると思われる。この閉塞石的な礫群から外側の土層には，他の礫壁から外側の封土にみられる旧表土・地山土・木炭層といった基盤をなす堆積が全くみられない。そして，この部分が墓室とブリッジを結ぶ線上にあたること，墳丘の外形上の等高線に乱れがみられた位置であること，それに次に述べる墓室下の周溝が閉塞石的な礫群の下には延びていないことなどを考えると，未確認であるものの墓道の存在を予測させるものがあると思われる。

礫　　床（第８図）

床は長辺3.5m，短辺1.5mの長方形を呈し，ほぼ全面に礫が敷かれていた。礫床の厚さは５～10cmで，木炭も多く混っていた。墓室内の覆土と礫床との境界は，金環・鉄刀・筒形銅製品などの検出面をもって確認面とした。なお，床の北側で礫が少ないのは掘りすぎで，調査の手落ちであることを付け加えておく。

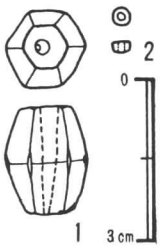
墓室下の周溝（第８図）

墓室下の周溝は幅が60～80cm，深さ40～60cmの箱掘りで，覆土中に木炭層が数層入っていた。周溝が確認されたのは東・西・北面の礫壁の下部だけで，南面の閉塞石的な礫群の下部には溝が検出されなかった。ここで墓室下の周溝の平面プランを推測すると，周溝は墳丘南側のブリッジに向って開くように礫壁の下にだけ限って巡っていると思われる。周溝が礫壁の下に存在すると言っても，周溝の方が礫壁よりも墓室内に張り出して掘られ，周溝と礫壁の間にスキ間を生じている。これはスキ間に板材を立てて礫壁の礫を積みあげたのではないかと推察することができるなど，注意しなければならないだろう。



墓室礫壁

7．遺　　物

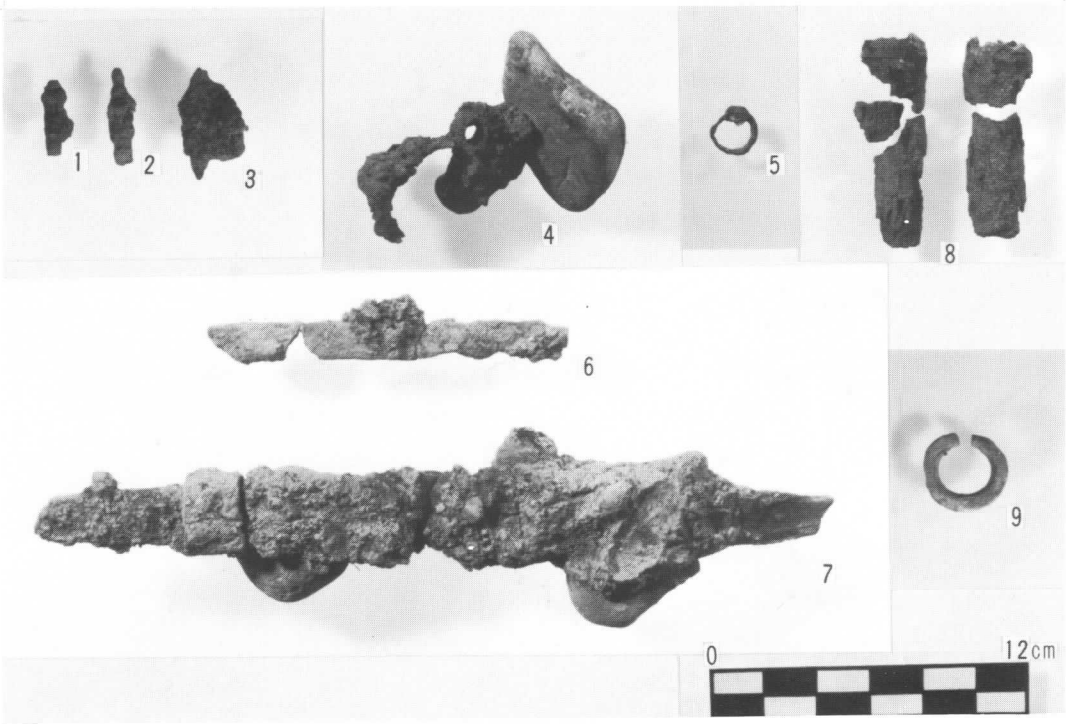


第9図　玉

（1）墓室内出土遺物（第9・10図）

墓室内からは，鉄刀1（第10図7），刀子1（第10図6），刀装具（第10図4・5），鉄鏃3（第10図1・2・3），筒形銅製品1（第10図8），金環1（第10図9），ガラス小玉1（第9図2），切子玉1（第9図1）が出土した。このうち金属製品については遺存状態が悪く，実測不能のため保存処理を依頼中である。遺物は墓室内南端礫床上面及び，そのやや上層より集中的に出土しており，埋葬頭位は南東方向（墓道方向）であったと思われる。

鉄刀　長さ29.5cm，刀身部幅3cm，柄部幅2cmを測る。責金具の裏面には木製鞘の一部と思われる木質が遺存していた。　**刀装具**　4は責金具で，先端に紐通しの環を有する。5は，径1.7cmのリングに幅5mm程の薄板が巻きつけてあり，これも紐通しの環であろう。材は銅で，表面に一部金箔が認められた。　**筒形銅製品**　径1.2cm，長さ7cmの筒形を成し，内部からは木質が検出された。器種は不明であるが，装柄部であろうと思われる。　**玉類**　2は径4mm，色調は青色を呈する。1は平面形6角形14面体の切子玉である。穿孔は片側から成され，面取りが施されている。材は水晶である。



第10図　墓室内出土品

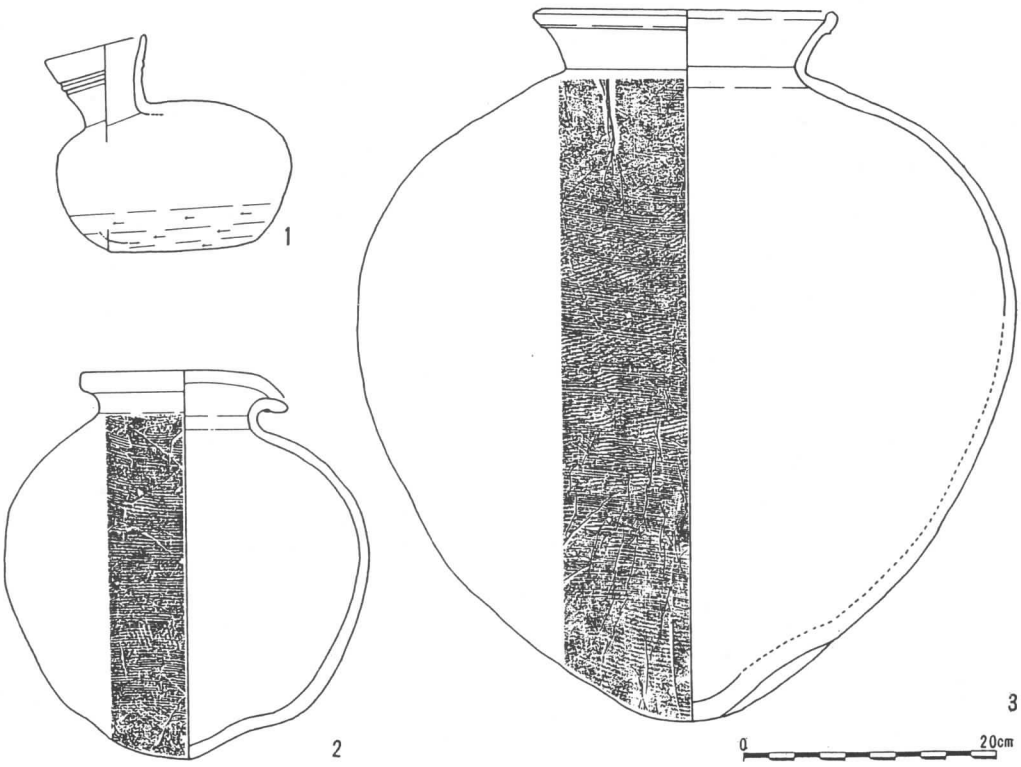
（2）供献土器（第11図）

本古墳より出土した土器は須恵器の平瓶（1），甕（2），大甕（3）の3点である。出土地点は平瓶・大甕が墳丘南側のブリッジ部西側立ち上がり付近，甕が墳丘東側の墳麓である（第6図3～6）。平瓶はほぼ完形に近い状態で，大甕・甕は押しつぶされたような状況で出土した。いずれも古墳築造時の土層直上より出土しており，古墳に伴うと考えられる。

平瓶　器高17.6cm，胴部最大径18.8cmの中形品である。丸味をおびた胴部は中央よりやや上に最大径をもち，天井部も丸く仕上げている。底部は平底気味である。斜め上方に開く口頸部には2条の凹線が巡っている。胴部のヘラケズリ痕は下半部¼を除き消去されている。

大甕　器高57.1cm，最大径を上半にもつ倒卵形の胴部に，「く」の字状に屈曲した短く径の小さい口頸部がつく。口縁部は肥厚し，断面形態は四角形に近い。尖底気味の丸底を呈する底部は側面にへこみが加えられ，この周囲の叩き痕が磨滅している。　**甕**　器高31.3cmの小形品で，丸味をおびた胴部に，片口状に一方が折り曲げられた短い口頸部がつく，丸底の底部はやはり側面がへこんでおり，周囲の叩き痕が磨滅している。これらのへこみは偶発的な焼き歪みであるにせよ，使用時に底面とされていた可能性は高い。

以上の須恵器の年代は，特に平瓶の形態的特徴から7世紀初頭ないし前葉と思われる。



第11図　供献土器

8．ま　と　め

大萱場古墳は眺望の悪い台地奥に単独で存在していた。形態はブリッジをもつ周溝を巡らした円墳で，封土は旧表土上の地山土とその上の木炭層を基盤として盛土を水平に積みあげている。墓室は下部にブリッジ側を開口部とした周溝を設け，その上に礫で床を敷き，礫で側壁を積みあげている。遺物は金属製品が墓室南側の礫床上から，須恵器がブリッジ及び周溝と，位置が限られていた。古墳の造営年代は須恵器から7世紀初めごろと考えられる。

本古墳の墓室について特徴的なことをまとめると，(1)墓室の側壁と床には礫が使われていること，(2)側壁と床には礫とともに木炭が混入していること，(3)側壁（礫壁）とその下の周溝との間にスキ間があること，(4)礫壁の内面は墓室内側に傾斜しながらもやや直線的に立ちあがっていること，(5)それに対して礫壁の外面の封土側は封土の堆積と合致しながら礫層が角のように飛び出していること，(6)礫壁は東・西・北の3面だけで，南面は閉塞石的な礫群であること，(7)閉塞石的な礫群から外側の土層には旧表土およびその上に盛られた地山土と木炭層がみられないこと，(8)閉塞石的な礫群の位置が墓室の長軸線とブリッジを結ぶ線上にあること，(9)墓室下の周溝は閉塞石的な礫群を開口部にするかの如くに巡っていることなどがあげられる。

以上のことから本古墳の墓室構造をさぐってみると，(1)(2)から墓室は礫室であること，(2)は調査で確認しないものの墓室が火を受けているかどうかを考慮しなければならないこと，(3)～(5)は礫壁と周溝のスキ間に板を立てて礫壁を積みながら盛土を裏込めしていると考えられること，(6)～(9)は墓道と閉塞石の存在を推測させられること，などが考えられる。これは本古墳の墓室が，墓道と玄室からなる横穴式の形態で，玄室は木室を礫壁でつつんだ可能性も指摘される。そして，本古墳の墓室はブリッジに開口する墓道を伴う「横穴式木芯礫室」もしくは「横穴式礫室」とも呼称される構造であったとの推測も考えられる。

このような本古墳の墓室は，近畿地方から東海地方に分布する「横穴式木芯粘土室」[註1]，南加賀地方の「箱形粘土槨」[註2]，福島県太平洋岸の加倉1・2号墳[註3]の例などとは，粘土を使用する点や墓室内の柱穴の存在などに相違点があるものの，大勢において類似していると思われる。もし，墓室が火を受けているとすれば，なお一層類似していると言える。他地方の墓室例はいずれも6世紀前半から7世紀前半にかけて造営されたもので，横穴式木芯粘土室のピークは6世紀終りから7世紀初めと言われている。この点からも本古墳はこれらの古墳の系譜を受けつぐものと思われる。

また，横穴式木芯粘土室や箱形粘土槨の被葬者は墓室の特殊性から，6世紀前半に各地へ移住した外来系氏族であろうと，大方のところで推測されている[註4]。本古墳の墓室は県内では類例の聞かない特異なものであり，横穴式木芯粘土室などの系譜を受けつぐものとすれば，

本古墳に眠れる被葬者も在地の地方豪族ではなく，ヤマト政権の地方支配政策の一環として移住してきた外来系氏族であることは想像に難くないだろう。

以上，本古墳の墓室構造を推測しながら被葬者の性格にまで言及してきたが，この他にも本古墳がもつ疑問や問題点は多々ある。例えば，ブリッジとその近くの周構から出土した平瓶・大甕からみた葬送儀礼，封土の基盤層の地山土上に分布する木炭層の問題，盗掘を受けたかどうかも含めた副葬品の貧弱さや位置の問題，それに眺望のきかない位置という本古墳の占地に関する問題など。これらは今後の課題として残しておきたい。

註１．柴田　稔「横穴式木芯荘粘土室の基礎研究」『考古学雑誌第68巻第４号』　1983年

２．北野博司「箱形粘土槨の再検討と横穴式木室との関連性について」『北陸の考古学』1983年

３．生江芳徳『加倉古墳群』　浪江町教育委員会　1979年

４．横穴式木芯粘土室の被葬者の性格づけは，墓室の特殊性から種々論議がかわされている。最近では柴田稔氏が下記の文献で，「死後観に対して特異なものを持ち，大和の大氏族に対して服従した畿内の小氏族あるいは渡来系氏族であり，大和政権によって，地方に移住させられ（略）」とされ，さらに註１の文献で，横穴式木芯粘土室は横穴式石室の代用として自生するとは思われないことなどの７項目の理由をあげ「６世紀前半ごろに各地へ移住した氏族で，（略）　その氏族は，地域において外来者であると同時に，基本的には渡来系の氏族を思考しなくてはならない」とされている。また，註２の文献をまとめられた北野博司氏はその中で「その被葬者は墓制の特異性や分布状態の示す特徴から考えて，極めて個性の強い集団である」とし，その具体像については，今後の課題としながらも柴田氏の下記文献の意見を「正鵠を得たものと言えるだろう」とされている。本古墳の被葬者もこの二氏の意見に従っている。

柴田　稔「横穴式木芯粘土室について」『磐南文化５』　1980年（註２より孫引き）

あ　と　が　き

長岡市の片すみで発見された大萱場古墳は，県内の古代史を考える上での資料を提供したことの意義はもちろんのこと，本古墳の被葬者の性格が外来系氏族とすれば，その全国的分布からも大きな意義をもつものと考えられる。そして，本古墳の存在はヤマト政権の地方支配の一翼を担った外来系氏族が，辺地と呼ばれた越後に，遅くとも7世紀初めには移住していたことを示すものと思われる。これがひいては7世紀半ばに対エゾの前進基地として設置された渟足や磐舟の柵の造営につながるのであろうか。

など，本古墳の存在を考える時，本県の古代史をめぐっての夢が果てしなくひろがる。この古代のロマンを与えてくれた大萱場古墳は，新潟県教育委員会，地域振興整備公団，長岡市ニュータウン対策課，長岡地域土地開発公社をはじめ，関係機関や関係者のお力添えを得て，保存される方向で検討されている。工業団地で働く人々に憩の場を与え，市民に歴史の散歩道として，おめみえする日も近いだろう。本古墳の発掘調査にご尽力を賜った多くの関係者に，心よりお礼申しあげる。

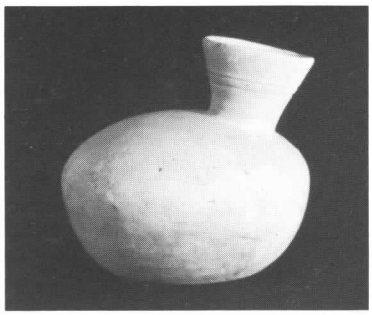
調　査　体　制

調査主体者　長岡市教育委員会（教育長　横田　博・丸山　博）

調査参加者　駒形敏朗，加藤正明（長岡市立科学博物館），松井　潔（岡山大学大学院生）
冨田和気夫，岩崎　均，小熊博史，佐野順一（以上，新潟大学学生）

調査事務局　大久保憲次，栃倉末作，鈴木孝行，五十嵐　整，小林貞子（以上　社会教育課）

大 萱 場 古 墳

昭和60年 3 月25日印刷　昭和60年 3 月30日発行

発行：長岡市教育委員会　　印刷：㈱第一印刷所中越営業所　新潟県長岡市神田町 2 丁目 1 番地 9